

県立高校入試が終わりました。多くの生徒が、ここに向けて努力と緊張感を持ち続けたので、今はほっとし「終わった～」と叫びたいところだと思います。でも、中学校（義務教育）は、ここがゴールではありません。中学校のゴールは「卒業式」です。その卒業式ですが、少しずつ今までの式のやり方に戻していきたいと考えました。その一つが、「式歌」を歌うことです。3年間、歌うことを制限された学校生活。心を込めて、精一杯合唱できたらと考えます。曲は「旅立ちの日に」ですが、なぜこの歌がいろんな学校で歌われているかみなさん考えてください。まず、この曲は誰が作ったものか知っているでしょうか？この曲が作られた経緯も含めて、下記にまとめてみました。

秩父市立影森中学校の校長だった小嶋先生は当時、荒れていた学校を矯正するため「歌声の響く学校」にすることを目指し、合唱の機会を増やしました。最初こそ生徒は抵抗したが、音楽科教諭の坂本先生と共に粘り強く努力を続けた結果、歌う楽しさによって学校は明るくなっていきました。「歌声の響く学校」を目指して3年目の1991年2月下旬、坂本先生は「歌声の響く学校」の集大成として、「卒業する生徒たちのために、何か記念になる、世界にひとつしかないものを残したい!」との思いから、作詞を小嶋校長に依頼しました。その時は「私にはそんなセンスはないから」と断られたが、翌日、坂本先生のデスクに書き上げられた詞が置かれていました。その詞を見た坂本先生は、なんて素適な言葉が散りばめられているんだと感激し、その後、授業の空き時間に早速ひとり音楽室にこもり、楽曲制作に取り組むと、旋律が湧き出るように思い浮かび、実際の楽曲制作に要した時間は15分程度だったそうです。出来上がった曲は、「3年生を送る会」で教職員たちから卒業生に向けてサプライズとして歌われました。この年度をもって小嶋校長は41年に及ぶ教師生活の定年を迎えて退職したため、小嶋校長が披露したのはこれが最初で最後となりました。元々はこの1度きりのため作られたはずであったが、その翌年からは生徒たちが歌うようになりました。出来てからしばらくは影森中学校だけで歌われた合唱曲であったが、次第にまわりの小中学校でも歌われるようになりました。当時東京都の中学校で音楽教諭を務めていた作曲家の松井孝夫さんは、この曲を知ると混声三部合唱への編曲を行いました。これが音楽之友社の雑誌『教育音楽』に取り上げられたことで、1998年頃までに全国の学校で歌われるようになりました。さらには、2004年3月に『情報ライブ EZ!TV』で取り上げられたことや、2007年にSMAPが出演するNTT東日本のCMソングに起用されたのをきっかけに、小中高校の卒業式で定番のように歌われていた『仰げば尊し』や『巣立ちの歌』、『贈る言葉』などを抜き、全国で最も広く歌われる卒業式の歌となりました。

私も、教師になり卒業式で何度か耳にした曲ですが、何度聞いても感動し忘れられない曲と歌詞です。次号では、その歌詞に込められた思いや情景について、解説してみたいと思います。



小嶋登校長と坂本浩美先生



秩父ミュージアム内にある歌